

60時間で何を教え、習得させるのか？：九州大学大橋キャンパスにおける初級日本語クラスのデザイン

小山, 悟
九州大学留学生センター：准教授

<https://doi.org/10.15017/4783550>

出版情報：九州大学留学生センター紀要. 28, pp.49-64, 2020-03. 九州大学留学生センター
バージョン：
権利関係：

60時間で何を教え、習得させるのか？

—九州大学大橋キャンパスにおける初級日本語クラスのデザイン—

What Should We Teach in 60 hours?

Designing an Elementary Japanese Language Course at OHASHI Campus

小 山 悟*

〈要旨〉

本稿は九州大学大橋キャンパスで行われている日本語授業（初級）の実践報告である。大橋キャンパスの初級クラスは予算等の問題もあり、2レベル（初級1・2）のみで、授業も週2回×10週間しか行われていない（全40回、60時間）。そのような短時間であっても、受講者が全員半年または1年の短期留学生であったなら、「行けるところまで行って終わり」でよいのだが、初級2のクラスには半年または1年後に修士課程への進学を控えた研究生が複数いて、「中級クラスにどう繋ぐか」も考えなければならぬ。また、小規模なコースであるため、細かくレベル分けすることもできない。そのような悪条件の中で、学生たちのニーズに応えるためにはどうすればよいのであろうか。本稿では、「初級とは何か」という点まで立ち返ってこの問題について考え、大橋キャンパスの実情に合った初級クラスのあり方について現実的な解決策を提案しようとするものである。

キーワード：シラバスデザイン、教材開発、文法の規則と表現、共有語彙と個別語彙

1. 問題の背景

筆者が本学に着任した1996年当時、留学生センターの日本語初級クラスは4レベルに分けられており、週4回の90分授業が15週間行われていた（小山1997）。つまり、日本語をゼロから学び始めた学生が初級を終えるまでに全240回（単純計算で360時間）授業を行っていたということである。

その後、「初中級」のクラスを新設することになり、初級は3レベルに減らされるのだが、それでも総授業回数は180回（270時間）であった。

代表的な初級の教科書である『げんき』（The Japan Times）が総学習時間を200時間、『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）が300時間と想定している¹ことからわかるように、当時のカリキュラムは比較的ゆとりのあるものだったと言えよう。

一方、現在筆者がコーディネートを担当している大橋キャンパスでは、予算の問題などもあり、初級は2レベル（初級1・2）のみで、授業も週2回×10週間しか行われていない（全40回、60時間）²。総学習時間は1996年当時との比較でわずか6分の1、『げんき』との比較でも10

*九州大学留学生センター准教授

分の3である。多くの大学・日本語学校がしているような、市販の教科書を使って初歩からひとつひとつ順に積み上げていくオーソドックスなカリキュラムでは、上下2巻の上巻すら終わらないことは容易に想像できよう。

では、このわずか40回60時間の初級クラスで何をどこまで教えればよいのであろうか。本稿ではこの問題について「初級とは何か」という点まで立ち戻って考え、大橋キャンパスの日本語初級クラスの新たなカリキュラムと教材について提案したい。

2. 大橋キャンパスの抱える困難点

まず初めに、大橋キャンパスの初級クラスをデザインするにあたって考慮しなければならない問題点（教える側にとっての厳しい条件）について①受講者、②教科書と教授法、③レベル数の3つの観点から整理しておきたい。

2.1. 受講者

まず、受講者の特徴である。大橋キャンパスの場合、「初級1」の受講者の大半が欧米からの短期留学生（大学院生）で、留学期間は半年または1年である。学生たちは皆、日本の生活や文化、言語に対する興味・関心をそれなりに持っているが、専攻は建築やデザインであって、日本語の学習が留学の主目的ではない。学生たちにとって日本語学習は留学生生活をより楽しく豊かなものにするためのものであり、比較的ゆったりとした進捗で学習することを望んでいると言ってよいであろう。ゆえに、日常生活に必要な基礎的なコミュニケーション能力の習得を第一目標とし、合わせて日本の文化や社会に関する情報を提供していくのがよいと思われる。

一方、「初級2」の受講者は、大きく以下の2つのグループに分けられる。1つは前の学期に初級1を受講し、その学期を最後に帰国予定の短期留学生たちのグループである。もう1つは半年または1年後に修士課程への進学を控えた研究生たちのグループで、その多くは中国語または韓国語が母語である。後者の学生たちも前者と同様、基礎的なコミュニケーション能力の習得を当面の目標とすることでよいと思われるが、進学後のことを考え「少しでも早く先へ進みたい」と思っている学生がいることを考えると、アカデミックな学習技能の習得も視野に入れておくべきであろう。

2.2. 教科書と教授法

次に、教科書をどこまで勉強するかである。初級の教科書はほぼ例外なく文型中心のシラバスを組んでおり、一般に、最初に文型と語彙の導入を行い、文レベル・談話レベルの練習をした後、市販の副教材などを使ってコミュニケーション的な運用練習をするという流れになっている。初級1の場合、半数以上の学生がその学期限りで帰国するため、学生の様子を見ながら、教科書の「行けるところまで行って終わり」でよいのかもしれない。具体的に言えば、「丁寧形の文法」（山内 2009: 47）、『みんなの日本語』で言えば、13課あたりまで進めれば十分と割り切れることもできるであろう。

問題は初級2のクラスである。受講者が全員その学期を最後に帰国予定の短期留学生だったなら、初級1と同様、「行けるところまで行って終わり」でもよいのだが、進学を控えた研究生たちのことを考えると、「中級クラスにどう繋ぐか」も考えなければならない。できることなら、ひととおりの最後まで勉強させたいところである。しかし、それは容易なことではない。仮

に、初級1で『みんなの日本語』の13課まで勉強したとして、初級2で残りの37課（14～50課）を10週間で勉強しなければならない計算になるからである。1週間に4課弱のペースである。しかも、週平均150語のペースで語彙も覚えていかなければならない³。到底不可能であろう。

ならば、教科書の重要な部分だけを抜粋して教えるのはどうであろうか。初級の後半で学習する文型・文法の中には、例えば「～である／～ておく」のように、必ずしも使用頻度の高いものや、「～ほうがいい」や「～かもしれない」のように、動詞の活用規則さえ知っていれば、教員が詳しく説明しなくても、母語に置き換えて理解するなどして、「文を作る」程度のことなら自分でできるというものも少なくない。それらを飛ばして（学生たちの自律自習を期待して）先に進めば、ある程度のところまで進むことができるであろう。しかし、やはりこれも非現実的である。というのも、初級の教科書はどれも「積み上げ式」の教授法を採用しており、文法も語彙も前の課で学習した内容が一定程度定着していることを前提に次の課を学習する仕組みになっているからである。飛ばして先へ進んだとしても、そこにそれが既習の文型・語彙として出てきたなら、結局は授業で取り上げざるを得ない。

2.3. レベル数

最後にクラス分けの問題である。初級のクラスが2レベルしかないということは、「ゼロ初級者」以外の初級者は全員、初級2のクラスで受け入れなければならないということである。それはつまり、初級1で丁寧形の学習を終えたばかりの学生も、来日前に普通形の学習を終えている学生も、中級クラスに入れない以上、皆

一緒に同じ授業を受けるということである。教える側にとってそれがどんなに困難な状況であるか、日本語教育の経験者なら誰でも容易に理解できるであろう。受講者が一定数以上いれば、事前の習熟度（レディネス）や学生の身分（短期留学生か研究生か）、出身地（漢字圏出身か非漢字圏出身か）、母語などの違いによってクラスを2つ、または3つに分けることもできるのだが、大橋キャンパスの初級2の受講者は毎学期10名いるかどうかである⁴。とてもそのような余裕はない。

要するに、常識にとらわれていては、この難問は解決できないということである。ここは一旦「初級とは何か」という点まで立ち返って考えてみる必要があるであろう。

3. 初級とは何かを考える

3.1. 初級の定義

では、「初級」とは何であろうか。かつては到達目標や学習内容を基準に定義されることが一般的で、旧日本語能力試験でも大橋キャンパスの初級1に相当する4級と初級2に相当する3級の認定基準を以下のように定義していた⁵。

【4級】初歩的な文法・漢字（100字程度）・語彙（800語程度）を習得し、簡単な会話ができ、平易な文、又は短い文章が読み書きできる能力（日本語を150時間程度学習し、初級日本語コース前半を修了したレベル）

【3級】基本的な文法・漢字（300字程度）・語彙（1500語程度）を習得し、日常生活に役立つ会話ができ、簡単な文章が読み書きできる能力（日本語を300時間程度学習し、初級日本語コースを修了したレベル）

しかし近年、CEFR（ヨーロッパ共通参照枠）を参考に「何ができるか」「どのような課題が遂行できるか」という観点から能力基準が再定義されており、そのCEFRでは「基礎段階の言語使用者（A1・A2）」を以下のように定義している（吉島・大橋 2004:25）。

[A1] 具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

[A2] ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係が

ある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単に日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。

国際交流基金でもCEFRの考え方を基礎として独自のスタンダード（JFスタンダード）を開発しており、日本語能力試験も新試験では「何ができるか」という観点から各レベルの能力基準を再定義している。

表1は、国際交流基金（2011）から引用した「初級・中級・上級」の各レベルに係る要素の一覧である。この表に記された内容に全く異論はないが、1つ注意しなければならないことは、これは評価基準であって必ずしも「到達目標」ではないということである。具体的に言えば、専門的な語彙を使いこなせていれば、その学習者の語彙力は上級とみなすことができるが、それは「専門的な語彙は上級者になってか

表1 「初級」「中級」「上級」レベルと関係する要素（国際交流基金 2011: 15）

レベル	初級 (基礎的な段階)	中級 (自立した段階)	上級 (熟達した段階)	
話題 場面	基本的、日常的 個人的、具体的	やや抽象的 一般的、公的	専門的、抽象的 複雑な状況	
課題 できること	単純な課題	やや複雑な課題	複雑で困難な課題	
ことばの 知識	文法	単語 → 短い文 → 長い文 → 段落 → 複段落 単純な表現 → 微妙な機能の違いやニュアンスの違いを表す		
	語彙	よく使う単純な語彙 → 一般的な語彙 → 専門的な語彙 微妙な意味の違いを表す		
	音声	たどたどしい発話 ゆっくり、はっきりした発音の聞き取り	→ 流暢な発話 → 自然な発話の聞き取り	
	文字	ひらがな・カタカナ 日常の漢字	→ 専門分野の漢字	
談話 能力	単純な表現 → 単純なやり取り	文と文の関係を示す →	段落間の関係性を示す 連続したやり取り	
社会言語 能力	配慮のいらぬ発話	→	相手に合わせたことばの使い分け 敬語の使用	
ストラテジー能力				

ら教えるべき」という意味ではないということである。また、初級者だからといって日常的で個人的な話題しか取り上げてはいけないということでもない。大橋キャンパスの初級1・2の受講者は初級者とはいえ、皆大学院生であり、彼らが望むのであれば、例えば各自の研究内容を話題として取り上げることも必要であろうし、それに伴い、一般的には「中級」または「上級」に分類される語彙であっても教える必要があるということである。

3.2. 初級文法とは何か

次に、「初級」文法とは何かという点について考えてみたい。この問題を考える上で1つの指針となるのは山内(2009)の研究である。山内はKYコーパスを使い、『みんなの日本語』で学習するいわゆる「初級」文法が、実際にどのレベルの学習者の発話に頻繁に現れるようになるのかを分析している。表2はその分析結果を筆者が表にまとめたものである。

山内は、中級になって出現頻度が顕著に高まった文型・文法は、初級での学習効果が現れたものと見なし、「初級」文法と定義しているのであるが、この表を見ると、初級の教科書で学習する文型・文法の多くが中級または上級に分

類されていることがわかる。具体的に言えば、受身や条件節の「～と・～ば」などは中級の学習者どころか、上級の学習者でも頻繁には使えていないということである。また、見方を変えて、「中級レベルの会話ができるようになるためには、どの程度の文法知識が必要か」と考えてみると、『みんなの日本語』の1課から13課程度(丁寧形)の文法知識さえあれば十分ということになる。

だからと言って、14課以降の文法は中級や上級になってから勉強すればよいということではない。それらの文型・文法も知識として知っておくことには十分意味があるからである。ただ、学習してから実際に使えるようになるまでに一定の時間が必要なもので、(他の文型・文法では代用できない⁶⁾丁寧形の文型・文法と同じ手順・方法で教える必要があるのであろうか。理解と運用は必ずしも一体である必要はなく、学習した以上すぐに使えるようになってほしい文型・文法と、とりあえず知識として持っていればよいというものを分けて考えてもよいのではないかということである。

この点について山内は「初めに言葉(文型)ありき」ではなく、「初めに言語活動ありき」という考え方でシラバスを作ることを提案してい

表2 山内(2009)によるKYコーパスの分析結果(小山2016より)

初級	【助動】 です、た、ます、ない、たい、ようだ 【補動】 ている 【終助】 か、ね 【接助】 て、けど、たら、たり、とき、ため	
中級	【終助】 よ、ね 【接助】 から、が、し、ながら	【助動詞】 使役、はずだ、そうだ(様態/伝聞)、つもりだ、ばかりだ、ところだ
上級	【助動】 のだ、受身、 【補動】 てくる、てしまう、てみる 【接助】 と、ば、ので、のに	

る。そして、理想のテキストについて「言語活動が『易』から『難』へと順序よく配列されているのみでなく、文法も『易』から『難』へと順序よく配列されており、しかも、両者が独立して存在しているのではなく、文法が言語活動を支えるような形で存在している」(山内 2009: 70-71) と、そのイメージについて語っている。また、その一方で「文型・文法を言語活動にくっつけて教えることは、かえって非効率になることもあるのではないか」という指摘⁷⁾に対しては次のように述べている。

「活用の習得を前提としない文法（丁寧形の文法）だけを学習項目として、文法を前面に出した入門テキストを作り、まずは、そのテキストをごく短期間で済ませてしまう、というのはどうでしょうか。そして、その後に『バンク型教材⁸⁾』で、それぞれの学習者がそれぞれの目的に合った言語活動を選んで、その言語活動の遂行を支える文法・文型を学習するのです。」(山内 2009: 114)

山内のこの考えを大橋キャンパスの初級クラスに当てはめれば、初級1の最初の3～4週間を丁寧形の文法の学習に当て、初級1の後半からは「言語活動ありき」の考え方に沿って、ロールプレイなどの活動を中心に授業を進めていくということになるであろうか。

3.3. 初級語彙とは何か

もう1点、語彙の問題についても考えておきたい。語彙の指導の難しさは、第一に、学習すべき語の数が文型・文法とは比較にならないほど多いことである。『げんき』ではおよそ1,700語、『みんなの日本語』でもおよそ2,000語を学習することになっており、旧日本語能力試験で

も前述のとおり、3級の認定基準を「1,500語程度」としていた。

第二に、必要な語彙は一人一人違うという点である。例えば、クラスで学生たちに自己紹介をさせる時、「趣味に関する語として何を教えるべきか」と考えてみる。「映画」や「音楽」、「旅行」など、趣味以外の話題でも頻繁に使う語（汎用性の高い語）を教えることには誰も異論を挟まないであろう。しかし、「山登り」や「刺繍」はどうであろうか。典型的な趣味ではないかもしれないが、それを趣味とする学生にとっては必須語である。しかし、そのような語まで取り上げていては、覚えるべき語彙の数は無限に広がってしまう。

そして第三に、受講者が漢字圏出身か非漢字圏出身かという問題がある。語彙を増やす上で漢字の知識は非常に有益かつ重要で、日本語との同型類義語が多い中国語母語話者が他の学習者に比べて有利なのは言うまでもない。逆に言えば、非漢字圏出身の学生にとって語彙の増強にはかなりの労力が必要ということになるのだが、具体的な教授法についてははまだ「頻度の高いものから順に教える」や「カテゴリー別に分けて教える」といった程度に留まっているように思われる。結局最後は「覚えさせるしかない」「学生の努力に委ねるしかない」ということなのであろうか。ならば、その負担をできるだけ小さくすることを考えなければならないであろう。

ただ、一方で、シラバスを組む際、語彙には文型・文法のような階層性がないことは1つの利点である。例えば、「～てください」という表現を学ぶ場合、学生たちはまずテ形の作り方を知らなければならないし、テ形の作り方を学ぶためには、日本語の動詞には五段動詞と一段動詞があることを知らなければならない。ゆえ

に、初級の教科書の第1課を「～てください」から始めることはできない（もちろん、「聞いてください」や「書いてください」などの教室用語を定式表現として教える場合は別である）。

しかし、語彙についてはどうであろうか。例えば、日本の小学校で学ぶ外国人児童の場合、教科学習に必要な「値」や「求める」などの中級後半⁹の語彙を初級段階で教えてはいけいのであろうか。あるいは「値を求めなさい」という表現を固まりとして教えたなら、学生たちを混乱させてしまうのであろうか。そうは思えない。だとすると、語彙の学習は確かに大変であるが、文型・文法の学習とは違った負担の軽減策が何かあるのではないかと思えてくる。

4. シラバスデザイン

大橋キャンパスの初級日本語クラスでは、筆者が担当になって以来、独自にプリント教材を作成し授業を行ってきた。第1章と第2章で述べた事情により、市販の教材を使用できなかったからである。それを2017年度後期に大幅に組み替え、教材も作り変えたのであるが、今回再度改訂を行うことにした。以下では、現在改訂を行っている新たなシラバスについて紹介し、先に述べたいいくつかの問題点を踏まえ、全40回

60時間の初級クラスで何をどこまで教えるのかを具体的に考えてみたい。

4.1. デザインの手順

今回、シラバスの改訂は「文型・文法→話題→語彙→(文型・文法)」の順に進めた。出発点が「文型・文法」であるのは、知識学習には先にも少し触れたように、認知的な処理の観点から見て、やはり理解しやすい順番（階層性）というものがあると考えたからである。そこで、まず「核」となる「文型・文法」の学習順序を決め、それに合わせて、その「文型・文法」の使用が不可欠となるような「話題」を選んだ。そして、その話題について話したり聞いたりするために必要な「語彙」を選び、その語彙を使って「文型・文法」の練習問題を作成することにした。以下、順に見ていく。

4.2. 文型・文法

まず、文型・文法である。これには「規則」と「表現」の2つがあると仮定した。前者は一言で言えば「活用の知識」であり、文法シラバスの初級の教科書はこれを大きく3段階に分けて学習するようになっている(表3)。1つは動詞の活用（辞書形やテ形など）に関する知識を必要としない文型・文法で、山内（2009）の言

表3 初級文法の階層性¹⁰（小山 2015より）

レベル	概要	みんなの日本語
1	動詞の活用（辞書形やテ形など）の知識を必要としない文型（名詞文、動詞文・形容詞文、存在文、比較など）を使って単文レベルで話せるようになることが目標。	1～13課
2	動詞の活用（辞書形やテ形など）の知識を必要とする文型（「～ています」、「～ことができます」など）を使って単文レベルで話せるようになることが目標。	14～20課
3	普通形の知識を必要とする文型（トキ節や条件節など）を使って複文レベルで話せるようになることが目標。	21課～
4	レベル1～3で学習した文型を組み合わせた発話ができ、話者の気持ちや態度によって類似の表現を使い分けられるようになることが目標。	

う「丁寧形の文法」がこれに相当する。『みんなの日本語』で言えば、1～13課で学習する文法である。2つ目は動詞の活用に関する知識が必要な文型・文法（例、「～ています」や「～ことができます」など）で、『みんなの日本語』の14～20課で学習する文法が主である。ここまでは「単文を作るための文法」と言い換えることもできるだろう。3つ目は普通形の知識を必要とする文法（例、トキ節や条件節など）で、「複文を作るための文法」である¹¹。

先にも述べたように、「書いてください」と言うためには、まずは「書く」という動詞をテ形に変換できなければならない。教室用語として理屈抜きに教える場合を除けば、活用の知識は必要不可欠である。しかし、逆に言えば、テ形の作りさえ知っていれば、それに「ください」を付けたり、「います」を付けたりするだけで学生たちは自分である程度「表現」の幅を広げられるということでもある。同様に、普通形の作り方を知っていれば、文をつなぐことができ、連体修飾節やトキ節も使えるようになるということである。

そこで、文法の「規則」をシラバスデザインの一方の柱とし、初級1では「丁寧形の文法」を中心に、初級2では動詞の活用を1つずつ順に学習していき、最後にそれを「普通形」としてまとめるという案を考えた（表4）。

文法の提示順序としては従来の教科書と大きく変わらない。ただ1点違うのは、この案では通常初級の終わりの方で学習する「受身」や「使役」も、動詞の活用形の1つであり「単文を作るための文法」（表3のレベル2）であることから、初級2の学習項目に入れていることである。「意志形」や「条件形」についても同様で、「単文を作るための文法」ではないが、活用形の1つであるため、初級2の学習範囲とした。こ

表4 初級の「核」となる文型・文法（改訂案）

週	初級1	初級2
1	名詞文	辞書形
2	これ・それ・あれ	テ形
3	存在文	ナイ形
4	動詞文1	タ形
5	動詞文2	可能形
6	助詞	受身形
7	い形容詞	使役形
8	な形容詞	普通形
9	形容詞の過去形	意志形
10	比較	条件形

の点は山内（2009）の考えと少し異なっている。

山内はプロフィエンスの育成という観点から「初めに言語活動ありき」という考え方でシラバスをデザインすることを提案していた。丁寧形の文法を最初に短時間で教えてしまうのは効率を考えてのことで、基本的にはその言語活動に必要なものから順に学んでいくということなのであろう¹²。OPIの研究者としては当然の結論であり、初級2クラスの受講者が全員短期留学生なら、筆者も山内の案を採用していたであろう。ただ、進学を控えた研究生たちのことを考えると、山内の提案する「文法を前面に出したテキストを作り、それをごく短期間で済ませてしまう」という案を丁寧形の文法だけでなく、動詞の活用規則にまで広げ、初級2のクラスでも「一方の柱」として引き続き文法の学習を行うべきだと考えた。

4.3. 話題

シラバスデザインの一方の柱が文法の「規則」であるなら、もう一方の柱は「話題」である。そこで次に、各課の核となる文型・文法を使ってどんな話題について話させるかを考えた。そしてその上で、それに関連してどんな

「表現」を学ばせるかを考えた。ここでいう「表現」とは、先にも触れたように、動詞の活用形に何かを付与することによって作られる「テ形+もらえませんか」や「タ形+ことがあります」などの文型のことである。今回、「日本語文型バンク¹³」に収録されている日本語能力試験N4・N5レベルの文型221の中から表5の28表現を選んだ¹⁴。

「話題」を決める際、参考にしたものは特にない。「学生たちが身近な日本人に聞かれそうなことは何か」と想像したり、「何か日本事情的な話題を盛り込めないか」と考えて、20の話題を選んだ(表6・7)。前者は例えば「可能形」である。「私は〇〇ができる」と自分の特技について話すのも悪くはないが、そのような話題で日本人学生と話すことはあまりないのではないかと考えた。また、後者については「Vなければならない」を使ってお互いの国のマナーやタブーについて話したら、日本の文化や社会について理解するきっかけになるかもしれないと考えた(いずれも想像の域を出ていない)。

そのようにしてまずは各週の話題を決め、次に「その話題について話す時、使えると便利な他の表現は何か」と考えた。そうして選んだのが(初級2の第3週の場合)「Vてはいけない」と「Vなくてもいい」である。また、一方で「ナイ形を勉強する時、『知っている』という程度で構わないので、いっしょに勉強しておくといふ表現は何か」と考え、「Vないでください」を選んだ。このように、「規則」と「話題」の両面から各週の学習すべき表現を決めていった。

表5 初級1・2で学習する「表現」

マス形	Vませんか【誘い】 Vましょう【誘い】 Vましょうか【提案】 Vたい【欲求】 Vに〈移動動詞〉【目的】
辞書形	Vようになる【変化】
テ形	Vてください【要求】 Vてもらえませんか【依頼】 Vでもいい【許可】 Vてはいけない【禁止】
ナイ形	Vないほうがいい【勧め】 Vなければならない【義務】 Vなくてもいい【譲歩】 Vないでください【禁止】 Vなくなる【変化】
タ形	Vたことがある【経験】 Vほうがいい【勧め】 Vたり～たりする【並列・列挙】 Vたら【後】
可能形	可能形【可能】
受身形	V(ら)れる【受身】
使役形	V(さ)せる【強制】
意志形	V(よ)うと思う【意志】
条件形	Vば【仮定】 Vばいい【勧め】
普通形	～が【逆接】 ～から【原因・理由】 ～とき【時点】

4.4. 語彙

話題が決まったら、最後は語彙である。これについては、まず基本方針として、教科書に載せる語はできるだけ少なくしようと考えた。教科書に載せれば、その語は学生にとって「覚えることを要求されている語」ということになるからである。そこで、初級1・2ともに250語という上限を設けた。週平均25語である。ただ、

表6 初級1で扱う話題と表現（改訂案）

週	規則	話題
1	名詞文「～は～です」 ・助詞「の」 ・疑問文「Nですか」 ・疑問詞「何」	自己紹介 「私は学生です」 「私は九州大学の学生です」 「私の趣味は旅行です」
2	これ・それ・あれ ・否定文「Nじゃないです」 ・疑問詞「いくら」 ・疑問詞「何の」 ・この・その・あの	買い物 「これは何ですか」 「これはいくらですか」 「これは何の本ですか」 「このかばんはいくらですか」
3	存在文「～に～があります」 ・ここ・そこ・あそこ ・疑問詞「どこ」 ・疑問詞「誰」	学内・地域の案内 「ここは図書館です」 「駅はどこですか」 「駅の前に何がありますか」 「公園に誰がいますか」
4	動詞文Ⅰ（する動詞・移動動詞） ・否定文「Vません」 ・疑問文「Vますか」 ・副詞（頻度） ・助詞「に」（曜日）	毎日の生活 「私は毎日散歩します」 「私はあまり掃除しません」 「私は土曜日に図書館へ行きます」
5	動詞文Ⅱ（他動詞・自動詞） ・過去形「Vました・Vませんでした」 ・「Vませんか」「Vましょうか」 ・「Vましょう」 ・助詞「に」「から」「まで」（時間） ・助詞「で」（場所）	週末の出来事 「私は昨日6時に起きました」 「私は7時から9時まで散歩しました」 「私はうちで映画を見ました」 「いっしょに行きませんか」
6	助詞 ・Vたいです ・～へVに行きます ・助詞「と」（相手） ・助詞「で」（手段・方法）	旅行の計画 「私は北海道へ行きたいです」 「私は京都へお寺を見に行きます」 「私は友だちと新幹線で行きます」
7	イ形容詞 ・否定文「Aくないです」 ・副詞（程度）	名前がわからないもの 「それはすごく大きいです」 「それはあまり高くないです」
8	ナ形容詞 ・名詞修飾 ・形容詞の接続（順接・逆接） ・形容詞文Ⅰ「～は～がAです」	友人・家族の紹介 「鈴木さんは親切な人です」 「田中さんはやさしくて、真面目な人です」 「母は料理が上手です」
9	形容詞の過去形 ・形容詞文Ⅱ「～は～がAです」	感想・天気 「少し寒かったです」 「沖縄は海がきれいでした」
10	比較 ・「～は～よりAです」 ・「～より～のほうがAです」 ・「～と～とどちらがAですか」 ・「～で～がいちばんAです」	国の紹介 「～は日本より～です」 「～と日本とどちらが～ですか」 「～のほうが～です」 「日本で～がいちばん～です」

表7 初級2で扱う話題と表現（改訂案）

週	規則	話題
1	辞書形 ・五段動詞と一段動詞 ・XはVることです ・Vるのは～です ・XはVるのが～です	子供の時の夢 「私の夢はデザイナーになることでした」 「子供に勉強を教えるのは楽しいです」 「本を読むのが好きでしたから」
2	テ形 ・Vてもいいですか ・Vてください／Vてもらえませんか ・Vています ・Vて、～Vます	お願い・許可 「ひらがなで書いてもいいですか」 「手伝ってもらえませんか」
3	ナイ形 ・Vないでください ・Vなければなりません ・Vなくてもいいです	規則・マナー 「20歳までお酒を飲んではいけません」 「靴を脱がなければなりません」 「小学校で英語を勉強しなくてもいいです」
4	タ形 ・Vたことがあります ・Vたほうがいいです ・Vたり、Vたりします	助言・アドバイス 「病院に行ったほうがいいですよ」 「それを買わないほうがいいですよ」
5	可能形 ・Vようになりました ・Vなくなりました ・Vようになりません	生活の変化 「自分で料理を作るようになりました」 「風邪をひかなくなりました」 「自転車に乗れるようになりました」 「ご飯が食べられなくなりました」 「まだ上手に話せるようになりません」
6	受身形 ・受身文Ⅰ（直接受身） ・受身文Ⅱ（間接受身）	歴史 「この絵は奈良で発見されました」 「このお寺は世界遺産に登録されています」
7	使役形 ・使役文Ⅰ（他動詞） ・使役文Ⅱ（自動詞） ・Vてほしい	教育 「子供に日本語を勉強させたい」 「子供を外国に留学させたい」 「子供に医者になってほしい」
8	普通形 ・～と思います ・トキ節 ・連体修飾節	第一印象 「初めて見た時、すごいと思いました」
9	意志形 ・Vようと思います ・～たら、Vようと思っています	計画 「この問題について研究しようと思います」 「卒業したら、国へ帰ろうと思っています」
10	条件形 ・～時は～Vばいいです ・Vば、～Vます	困ったとき 「わからない時は、先生に聞けばいいです」 「ネットで調べれば、すぐわかります」

話題によってはより多くの語が必要になることもあるため、各週ごと（90分2コマ）の上限も設け、これを30語とした。

次に、語彙を「共有語彙」と「個別語彙」の2つに分けた。前者は、教室活動をする上で全員が知っておいてほしい語彙である。例えば、授業でインフォメーション・ギャップ・タスクを使った活動をする際、学生同士、ある程度語彙を共有していないと対話が成り立たない。一方、後者は個々のニーズに合わせて学習すべき語彙で、その学生の個人的な出来事や考え、事実について話す時に必要となるものである。前述の「山登り」や「刺繍」がこれに当たる。250語という上限はこの「共有語彙」に対するもので、250語（初級1・2合わせて500語）覚えればそれで十分と思っているわけではない。学生たちのコミュニケーション能力を高める上で鍵となるのは文型・文法よりもむしろ語彙であり、語彙は多ければ多いほどよいと考えるからである。ただ、先にも述べたように、必要な語彙は一人一人違うため、また、学生の「覚える負担」をできるだけ小さくするためにも、共有語彙の数をできるだけ少なくした方がよいと考えた。それ以外の「個別語彙」については各自が必要なものを自分で増やしていくことを期待している。あるいは、宿題などを通じてそのように促すことを考えている（宿題については後述）。

語彙についての筆者の改訂案は表8に示したとおりである。ここには初級1の共有語彙のうち、各週の話題と関連の深いものを載せてあり、全部で194語ある。残りの56語については、今後教材の完成に向けた作業の中で確定させていくことになるが、表からも明らかなように、先へ進めば進むほど、話題と関連の深い語彙の数は減っていく。学習の初期段階においては、例えば初級1の第2週の「数字」のように、「こ

こでこれを教えておかないと練習（例、値段の聞き取り）もできない」というものが多い。しかし、ある程度語彙が増えると、「これはどうしてもここで」というようなものは少なくなり、新たにいくつか語彙を増やすだけで、その話題について話せるようになる（そのため、初級2の語彙リストは割愛した）。

一方、初級1の前半においては語の選定が非常に難しかった。その結果、名詞で言えば、「辞書」や「新聞」、「学校」などが外れており、動詞でも「話します」や「教えます」、授受動詞などが抜けている。また、形容詞についても「つまらない」や「まずい」が入っていない。これらの語は今後、比較的ゆとりのある初級1の後半で改めて追加されることになるかもしれないが、そうならなかったとしても、学生たちがそれを必要と感じた時に、学生たちの求めに応じて教えればよいだけのことである¹⁵。あれもこれもと欲張って増やすよりも、学習時間の短いコースにおいては、最低限必要な語彙を着実に覚えていってもらうことを優先すべきだと考えた。

4.5. 漢字

最後に、漢字の扱いである。最初に述べたように、初級1のクラスは欧米系の短期留学生が大半を占めているため、日本語への興味・関心を高めるとともに、日々の生活をより楽しく豊かなものにするためにも、漢字を勉強させた方がよいと考えた。ただし、初級1ではまず平仮名を覚えなければならず、その後にはカタカナも控えている。それらはある程度習得してから漢字の学習を始めるとなると、その時には既に初級1のクラスは終了しているかもしれない。そこで、漢字についてはピクトグラムのように、学生たちの日常生活をサポートするための「記号」として学習させることにした。選んだの

表8 初級1で扱う話題と語彙（改訂案）

週	話題	語彙	漢字
1	自己紹介	私、大学、学生、留学生、名前、国、趣味、専門、仕事、出身、何、ありがとうございます（ございます）、いただきます、おはよう（ございます）、おやすみなさい、ごちそうさま（でした）、こんにちは、こんばんは、さようなら、じゃあまた、すみません、おさきに（しつれいします）、おつかれさまでした、はじめまして、どうぞよろしく【25語】	日本、九州、福岡、博多、天神
2	買い物	これ、それ、あれ、この、その、あの、いくら、何の、1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、100、1000、10000、円、本、時計、鞆、傘、財布、日本語、英語【29語】	注、危、禁、止
3	学内・地域の案内	ここ、そこ、あそこ、どこ、だれ、あります、います、上、下、中、前、後ろ、右、左、隣、近く、うち、駅、公園、図書館、病院、銀行、コンビニ、スーパー、～屋、先生【26語】	時、日、月、年、分
4	毎日の生活	運動します、買い物します、散歩します、洗濯します、掃除します、勉強します、料理します、行きます、来ます、帰ります、毎日、よく、ときどき、あまり、ぜんぜん、月曜日、火曜日、水曜日、木曜日、金曜日、土曜日、日曜日、何曜日【23語】	火、水、木、金、土
5	週末の出来事	食べます、飲みます、読みます、聞きます、見ます、買います、書きます、起きます、寝ます、会います、入ります、～時、何時、～半、お風呂、ごはん、パン、お茶、音楽、論文、テレビ、友だち、それから【23語】	大、小、上、中、下
6	旅行の計画	飛行機、新幹線、地下鉄、電車、バス、車、自転車、家族、旅行します、とります、写真、いつ、今週、先週、来週、今日、昨日、明日、朝、昼、夜【21語】	開、閉、階、口、男、女
7	名前がわからないもの	大きい、小さい、重い、軽い、高い、安い、長い、短い、いい、おいしい、おもしろい、赤い、青い、白い、黒い、黄色い【16語】	食、肉、魚、飲、茶、酒
8	友人・家族の紹介	明るい、元気、大人しい、まじめ、きれい、かわいい、親切、やさしい、好き、嫌い、難しい、簡単、上手【13語】	病、歯、薬、医、内、外
9	感想・天気	暑い、寒い、暖かい、涼しい、天気、晴れ、雨、曇り、雪、【9語】	道、通、橋、駅、鉄、港
10	国の紹介	有名、便利、危ない、安全、賑やか、静か、多い、交通、人口、自然、物価、世界、～度、～月、【14語】	東、西、南、北、右、左

は地名を表す5つの漢字語彙と日常生活でよく見かける49の漢字である（表8右段）。これを、図1のような写真やイラストをヒントに各漢字の意味を考えるタスクにし、毎週授業の最後に5分ほど時間をとって行うことにした。また、初級2では初級1で学習した漢字も含め、部首別に漢字を整理し、初級1と同じようなタスクを使って学習することにした。漢字の読み書きの練習は授業では行わない。なお、漢字圏出身の学習者にはこれとは別の、「告訴（知らせる・

教える）」のような同型異議語を題材にした課題を与えることにした（現在作成中）。

図1 漢字のタスクで使用したイラスト¹⁶

5. コースデザイン

先にも述べたように、大橋キャンパスの初級日本語クラスでは、本稿で示したシラバス案(旧案)に沿って2017年度後期から既に授業を開始しており、教材作成も行っている。そこで、ここでは過去2年半行ってきた授業の具体的な進め方について簡潔に紹介しておきたい。

5.1. 文法クラス

授業は初級1・2ともに、週2回の授業を「文法」クラスと「会話」クラスに分けて行っている。本稿で紹介したシラバス案で言えば、表6・7の「規則」が「文法」クラスのシラバス、「話題」が「会話」クラスのシラバスである。表向きは独立した2つのクラスであるが、実際の授業内容は互いに関連づけられている。

文法クラスでは学生たちに予習を義務付けている。毎週、Moodleにアップロードされたハンドアウト(簡単な文法説明と例文、練習問題で構成)を読み、教室で配布された解答用紙に練習問題の答えを記入してくるというものである。教室で筆者の説明を聞いてから練習問題を解くより、一度自分で考えて解いた後で教師の説明と答えを聞いた方が、理解がより深まるのではないかと考えた。また、初級2のクラスでは、研究生の多くが来日前に市販の教科書を使って初級文法の学習をひととおり終えているのだが、学習したというだけで、理解が不十分であることが多い。語彙も見ればわかるものの、聞いて理解できる状態にはなっていない。そのような学生たちに文法説明から始まる授業をしても、「もう勉強した」「もう知っている」と思っている学生たちは、授業に身が入らない。そこで、事前に予習をさせ、クラスで解答することで、理解が不十分な点があることに気

づかせようと考えた。

授業は非常にオーソドックスなものである。筆者が補足説明をしながら練習問題の解答をした後、市販の教材を使ってリスニングの練習をしたり、その日学習した文型・文法を使ってQAの練習をしたりしている。事後のクイズもハンドアウトの練習問題と同じ形式のものである。

5.2. 会話クラス

一方、会話クラスでは、直前の文法クラスの授業が実質的な予習となるため、予習は特にさせていない。授業は表6・7に示した「話題」についてインフォメーション・ギャップ・タスクをしたり、ロールプレイをするなど、活動中心で進めている。重きを置いているのは予習ではなく復習で、授業で練習した会話を教室外で再度練習するために、インタビュータスクを宿題として課している。例えば、初級1の第1週で「自己紹介」の練習をした後には、身近にいる日本人の知り合いに、趣味や出身地について尋ねさせている。また、第2週の買い物では授業中に「〇〇は〇〇語で何ですか」と聞き合う練習をしているため、身近な日本人に自分が知りたい日本語の語彙・表現について「〇〇は日本語で何ですか」と質問させるタスクを宿題として出している。これは「個別語彙」の増強を狙ったもので、第7週でイ形容詞について学習した後にも行っている。また、語彙クイズを毎週行い、それを成績に入れるようにしている。

6. 結論

初級の教科書を勉強するのになぜ200時間も300時間もかかるのかと言えば、それは文法だけでなく、膨大な数の語彙も合わせて覚えなけ

ればならないからである。しかも、その中にはその学習者にとって必ずしも必要ではない語も数多く含まれている。ならば、覚えるべき語彙の数を極力少なくし、一定程度文法学習に集中できるようにすれば、漢字圏出身の学生たちなら、もっと短時間で初級を終え、中級へ進めるのではないか。そう考えたことが本研究の始まりであった。

また、山内 (2009) が明らかにしたように、いわゆる「初級文法」の中には上級者でも頻繁には使わないものが数多くある。ならば、それらを学習項目から外すことで、さらに短時間で初級を終わらせることができるであろう。

もちろん、初級を早く終わらせること自体が目的なのではない。山内が提案しているような言語活動ありきの授業を実践するために、その学生にとって本当に必要な言語課題に取り組みめる状態までできるだけ早く持つていくために、最低限必要な知識の学習に絞って、授業をしようと考えただけである。

ただ、現在改訂中のシラバスも教材も学生のニーズを直に調査して学習内容を決めているわけではない。いずれも想像の域を出ていないし、様々な制約の中で結果として選ばれたものも多い。また、筆者自身、まだまだ固定観念に囚われている部分があるかもしれない。今後はもう少し客観的なニーズ調査を行うなどして、学生たちが本当に必要としているものは何かを探っていきたい。

注

- 1 『げんき』については The Japan Times 社の *Genki-Online* (<http://genki.japantimes.co.jp/faq> : 2020年1月13日アクセス) から、『みんなの日本語』については本冊の「本書をお使いになる方へ」から引用。
- 2 大橋キャンパスの日本語コースの詳細は本号の報告「筑紫・大橋地区日本語コース 2014年度～2019

年度」を参照。

- 3 みんなの日本語の総語彙数はおよそ2,000であり、そのうちの4分の3を10週間で学習するとして計算した。
- 4 前掲の報告を参照。
- 5 <https://www.jlpt.jp/about/pdf/comparison01.pdf> (2020年1月13日アクセス)
- 6 例えば、「書いてください」という表現は「書きます。お願いします」と言えば伝わるし、「見てもいいですか」という表現も「見ます。いいですか」と言えば伝わる。しかし、丁寧形の文法(否定形や過去形)の場合には、「昨日行きます」(＝行きました)のような非文法的な発話をするか、「わかります。ダメ」(＝わからない)のような不明瞭な言い方をしなければならない。
- 7 山内は具体的な例として「ゼミコンパの予約をするために居酒屋に電話する」と言うロールプレイを行わせながら「～たいんですが」と言う文型を教えるのは、何となく効率がいいような気がします。(中略)しかし、助詞の「が」「を」「に」などの使い方をいちいち言語活動とくっつけて教えると言うのは、何だかまどろっこしいように思えます」(山内 2009: 113) と述べている。
- 8 バンク型教材とは、ネット上にプールされた教材群のことを言う。
- 9 語彙の難易度判定は J.Readability に基づく。<https://jreadability.net> (2020年1月13日アクセス)
- 10 山内 (2009) から着想を得て、初級で学習する文型・文法をこのような4つのレベルに分けた。
- 11 小山 (2016) では「名詞文より先に動詞文を教えたり、非過去形より先に過去形を教えたりすることは、学習者にとって負担が大きいかもかもしれないが、無理ではない。しかし、『丁寧形の文法』を学習する前にテ形やナイ形を教えたり、辞書形やタ形を学習する前に(普通形の知識を必要とする)「～と思う」や連体修飾節を教えるのは無理であることから、初級文法には容易には超えられない「壁」がいくつかあることを指摘した。表3の階層分けはこの考えに基づいている。
- 12 もちろん文法学習に負担が生じないように言語活動だけでなく、文法も「易」から「難」へと順序よく配列されるよう工夫されていることは、先に引用したとおりである。
- 13 日本語文型バンクの収録文型一覧 http://bunkeibank.ninjal.ac.jp/bunkei_list/
- 14 形容詞表現の「比較」は除外している。また、動作

の持続を表す「～ている」や、テ形による文の接続（「～て、～ます」）は日本語文型バンクに収録されていないが、初級の必須表現として初級2の学習項目に加えた。初級2の第7週で学習する「～てほしい」も話題との関連で独自に加えた。

- 15 同じ「山登り」という語彙を教える場合でも、教科書に載せて理屈抜きに覚えさせるよりも、学生の方から「mountain climbing は日本語で何と言うのか」を尋ねて来た時に教える方が、学生も必要性を感じている分、記憶に留めやすいのではないかと考えた。
- 16 2つのイラストは以下のサイトから引用。
<http://pictogrambox.com>
<http://freesozai.jp>
 (いずれも2020年1月13日アクセス)

参考文献

- 国際交流基金 (2011) 『国際交流基金 日本語教授法シリーズ 10 中・上級を教える』 ひつじ書房.
- 小山 悟 (1997) 「平成8年度前期プレースメントテストに関する考察」『九州大学留学生センター紀要』 8号, 169-176, 九州大学留学生センター.
- 小山 悟 (2015) 『イラスト満載! 日本語教師のための活動アイディアブック』 スリーエーネットワーク.
- 小山 悟 (2016) 「考える活動をベースにした授業の作り方— 地域の日本語教室の実情に合った地域の日本語教室独自の教え方とは? —」『言語教育の「商品化」と「消費」を考えるシンポジウム 報告集 Kindle版』 言語教育の「商品化」と「消費」を考えるシンポジウム運営委員会.
- 山内博之 (2009) 『プロフィেশンシーから見た日本語教育文法』 ひつじ書房.
- 吉島 茂・大橋理枝 (2004) 『外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 朝日出版社.